

国際会議の裏方－同時通訳の仕事



随 筆

ランプキン 朋子*

Behind the Scenes Conference, Interpreters, Work

Key Words : Purpose of English education, Convey nuances, Frame of Reference

会議通訳とその周辺

私はこれまで30数年にわたり、会議通訳の仕事をしてきた。会議通訳とは何か？会議通訳と言えるには、国際会議で同時通訳もできなくてはならない。国際会議の舞台裏、黒子とも言える会議通訳・同時通訳について少し紹介したい。

同時通訳はいつ頃始まったのだろう。日本ではアポロ月面着陸の際、國弘正雄、西山千、鳥飼久美子氏らが行ったのが知られている。世界的には第二次大戦後のニュレンベルクでの戦犯裁判が最初と言われる。

米国国務省（アメリカの外務省）にはランゲージ・サービス部門があり、職員通訳がいる。この人達は連邦政府職員、つまり月給をもらっている国家公務員だ。加えて、テストを受け私も登録していたが、契約通訳者制度がある。国務省からアサインメントをもらい、働いた日数に応じて支払いを受ける。

欧州にはAIIC（会議通訳者国際連盟）という由緒ある組織がある。ここに入るには200時間以上の会議通訳の実績と、既存メンバーからの推薦が必要となる。AIICは毎年会員名簿を作成し、世界の主要都市別にそこに拠点を置く通訳のリストを発表している。国際会議の事務局は、しばしばこれを参照して次期開催地での通訳を探す。

また主要国際機関、国連、世銀、WTOなども職員通訳（Staff Interpreters）を雇っている。国連では国連公用語の通訳がそれにあたる。国連公用語とは、第二次大戦の戦勝国の言葉である。英語、フランス語、スペイン語、中国語、ロシア語だ。またこれら列強はアジア・アフリカで植民地を多く有していたから、これらの言葉を話す人口は多い。日本語、韓国語、などはこれに当たらない。

日本の場合は外務省に国務省のような通訳認定制度はなく、高位高官の通訳は外交官が行い、会議の同時通訳はサイマルなど民間に委託する。サイマル、インターグループ、コングレなどの通訳派遣業社は大体同じような通訳者の基準を持っている。フリーの通訳者はこういうところに登録して仕事をもらう。

NY国連本部やジュネーブの欧州国連本部（元は第一次大戦後にできた国際連盟本部）の大会議場には、その後方中二階とか、最上階に通訳ブースと呼ばれる小部屋が並んでいる。通訳ブースからは会場が一望でき、会議の進行状態がすぐにわかるようになっている（写真参照）。英語・仏語・スペイン語などはどんな会議でも使われるので、これらの言語のブースは常設になっているが、日本語、韓国語などはその時々設定・指定される場合が多い。以前、NYの国連本部での環境会議だったが、日本語の仮設ブースが御多分に洩れず広い会議場の片隅に作られていて、日本の大臣の発言直前に私は英語ブースまで走って行かねばならなかった。この時は私のパートナーの通訳が日本語のチャンネルから大臣にむかって「少し待って下さい！」とお願いし、広い会議場を横切って私が英語ブースに到着するのを確認してから「大臣どうぞお話しください」と言ったのだった。

主要西欧語の英語、フランス語、スペイン語など



* Tomoko LUMPKIN

1970年 府立天王寺高校卒業
1974年 大阪外国語大学英語学科卒業、
EWCハワイ大学アメリカ学修士
国際会議や政府関係、民間企業海外IR
などの会議通訳者
2014年4月 米オバマ大統領と天皇后両
陛下の懇談、2015年4月 オバマ大統領
安倍晋三首相の首脳会談で通訳を務めた。
2019年5月 大阪大学から下記の称号
[Osaka University Global Alumni Fellow]



ジュネーブ欧州国連本部本会議場
(通訳ブースから見下ろして)



日本語ブースから横を見たところ、透明のガラス越しに各言語のブースが並んでいる。



日本語ブースの中



日本語ブースの入り口ドア

の通訳ブースでは一方向の通訳しか行わない。すなわち英語ブースでは複数の言語（ほとんどが欧州言語）から英語に直す作業だけをやる。また会場での発言が英語の場合は英語ブースは何もしなくていい。会場でフランス代表が発言すれば、フランス語ブースは開店休業となる。しかし、日本語ブースでは「日本語に」と「日本語から」の二方向の通訳を行うため常に稼働している。同様の双方向通訳は韓国語やアラビア語でもやっていて、これらを「エキゾチック・ランゲージ」と業界では呼ぶ。

仮に会場での発言がフランス語であったとしよう。日本語ブースにフランス語通訳がいれば、その人が

さっとマイクを取って、フランス語から直接日本語に同時通訳をする。しかし、フランス語通訳がない場合は英語ブースの出す英語を聞いてそれを日本語にリレー通訳する。こういう場合には英語ブースの力量が問われる。ベテランの英語通訳がやってくると論旨も明快で聞きやすく、日本語にも訳しやすい。反面、まだ経験も少ないとすぐにわかる英語通訳だと「英語」にはなっているが何を言っているのかがわかりにくく、英語からリレーを取る通訳（日本語のみならず他言語も）泣かせになる。

もう一つ、意外に知られていないことだが、国連などの会議場ではPAシステム（会議場全体のラウ

ドスピーカー)がなく演説も全員がイヤフォンから、聴きたい言語で聞くようになっている。それもあって、一見誰も発言していないかのように見え(聞こえ)、会場内は常にザワザワしてしまう。なのでしばしば議長が「私語は慎むように。話をする人は廊下に出て」と促す。

さて、同時通訳という作業はかなりの集中を要し、一人で長い時間できるものではない。2人または3人でチームを組み、15分前後で交代して行う(欧州言語、英語、仏語などは30分ぐらいで交代している場合もある)。自分の番が終わっても、完全に休んでいるわけではなく、数字などは書き取って、稼働中の通訳を助ける。日本語の同時通訳はチームプレーだ。上手な先輩のチームに入れてもらい、経験豊富な濃みない先輩通訳の訳を隣で聞くのは貴重だ。知らず知らず、浸透圧でリズムが伝わってくる。音楽のバンドと同じである。

「瞬時」に英語を日本語に、日本語を英語にしていくのだが、この作業では「聞く」方にエネルギーの70%を使い、「話す」方には30%を使えと言われる。訳出する方にはさほど力を入れずに、あくまでも「聞く」方に集中せよ、ということだ。訳す声も音量を出来るだけ抑え、聞く方に専念する。「話す(訳す)」方はその人の母国語にするのがいいとされる。意識的に考えなくても言葉が出るし、語彙も豊富だ。英語ブースで仕事をするには、2-3の言語から英語に訳す能力が求められる。先述のAIICでは登録の際にランゲージ・コンビネーション(自分の出来る言語)を記さねばならない。母国語(第一言語)なみの能力の言語はA、学習して習得した外国語はBとなる。さしずめ私なら日本語がAで英語はBないしはA'となる。

語順について

英語を日本語に訳す上での最大の難関はシンタックスすなわち構文、語順の違いだ。「動詞は言語の背骨だ」と言った言語学者がいたが、全く同感だ。英語も動詞が中心で、単純なSV(主語、動詞・述語)の構造、SVO(主語・動詞・目的語)の基本形が繰り返される。

I eat, I read a book だと(主語を省いて)「食べます」「本を読みます」となる。これだと即座に訳が

出る。難しいのは複合的な構造で、文中にSVが繰り返される場合だ。つまり、「従属節」が関係代名詞などで繋がって、いわゆる「先行詞」を修飾している場合である。自然な日本語、聞いてわかりやすい日本語にするには、通訳者は最初に出てくる主節を聞いて、一旦横に置き、関係代名詞に率いられる従属節を先に訳し、その後で先に横に置いていた主節にそれをかけて訳していく。関係代名詞の後の従属節が長いとこの作業も難しくなる。私もこれに慣れるには苦勞した。有能な先輩通訳の中にはこれを難なくやってのけ、本当に自然な日本語を綺麗に出す人達がいた。「英語を溜めてから訳を出しなさい」とよく言われたものだ。

しかし次の例を考えてみたい。

Microsoft has just released an exciting new software which will enhance productivity of many office workers around the world tremendously.

これを訳すと、「マイクロソフトは、世界中の事務員の生産性をすこぶる向上させる(ところの)ワクワクするような新しいソフトをだした。」となる。通訳は「マイクロソフトは」と主語をまず訳し主節の残りの部分はちょっと横に置いて、従属節を聴きながら訳して主節に戻る。これは高校時代にやった英文和訳と同じである。ところが従属節が長くなれば処理するのも難しい上に、聞き手には主節の情報が伝わるのが大幅に遅れる。これは果たして正確な訳と言えるのだろうか? 情報が出てくる順番も正確に再現すべきではないのか? 「マイクロソフトはワクワクするような新しいソフトを出しました。これによって世界の事務員の生産性はすこぶる向上するでしょう。」というべきではないのか?

幸い日本語は助詞を駆使すれば「順番」はかなり柔軟に対応できる。動詞を中心に情報単位で捉えて、英語で出てくる順番で訳していく方が正しいのではないだろうか? 英語で考え、表現している人たちの思考の順番をそのまま捉えるべきではないのか?

私自身、情報の出現の順序が気になり始めてからは、前からどんどん訳すようにしている。何よりこ

の方がはるかにやり易い。アメリカに暮らして50年近いが、英語がスラスラ読めるようになったのはここ数年である。今までは「従属節をひっくり返さねば」と無意識のうちにもそこで頭が緊張し読む速度が落ちた。この思考のストレス・呪縛から解放されるのに本当に長い時間を要した。帰国子女と言われる人たちが英語をスラスラ読めるのは、ひっくり返し、をやっていないからだ。この「ひっくり返して」は漢文のレ点に起源があるのだろうか？

余談になるが、日本の英語教育もこの点をしっかりと考えてみてほしい。そもそも英語教育の目的は何なのか。

翻訳家を養成することではなく、英語を速く読め、内容を把握する力をつけることではないのか。今日インターネットが発達して久しく、“All the information is at your finger tip” などと言われる。キーボードをたたいて、検索すればなんでもわかる。英語で得られる情報の多さは他言語の比ではない。翻訳ソフトを使えば日本語にもなるが、直接英語でとり得る情報の多さ・速さを考えるとまさに「英語帝国主義」である。デジタル化で英語の相対的地位がさらに上がった。検索して出てきた英語の内容、情報をそのまま理解できないと「損」なのだ。英語でどんどん情報を入手することにブレーキをかけているのが、関係代名詞。ひっくり返して理解しようとする癖・教え込まれた習慣である。早く、何千万人も学生がこれから解放されることを切望する。前から動詞を中心に短い情報の単位で捉えて、どんどん読んでいけるようにと願う。受験参考書は一掃し、そのためにも入試問題を根本的に変えるべき時期に来ている。

ニュアンスを伝える

ニュアンスを伝えるとはどういうことだろう。

訳を聞いて、「なるほど」「ピンとくる」「腑に落ちる」「納得する」ということかと思う。このように聞き手が感じるためには、何が必要なのだろう。通訳の醍醐味は、発話者の頭の中にある考え、心の中の感情・気持ちをできるだけそれに近い形で聞き手の頭や心の中に再現することだ。しかし、英語と日本語の間でこれをやるには、文化的な壁・価値観の違い、習慣の差を超えていかねばならない。「う

ちの犬」と言う人が無意識に浮かべている犬のイメージ（種類やサイズ）と“our dog”と言うアメリカ人が自動的に思い浮かべる犬との間に差はないか、ということである。あるいは、「炊き立てのご飯」と言う言葉が日本人に彷彿とさせるイメージは freshly cooked rice とする英語を聞いたアメリカ人には起こらない。これは当たり前のもので、習慣、価値観の違いに由来する。それぞれの国民、民族の長年にわたる経験の積み重ね、作り上げられた価値観の総和のようなものだが、私はこれを Frame of Reference と呼んでいる。（適切な和訳をずっと探しているのだが、見つけられていない。「参考になる、連想の枠組み」とでも言おうか。）ニュアンスを伝えるには、多少の足し算、引き算が必要になる。しかし、ここで通訳が恣意的に創作をしては決してならない。このバランスが難しいとも言える。

Frame of reference の違いゆえにジョークを伝えるのは極めて難しい。同じ言葉を聞いても、それによって連想する概念が異なるから、「何がおかしいの？」となってしまう。だが例外的にうまくいったこともある。20 数年前の関西経済同友会のポストンシンポジウムでのことだ。当時アメリカはブッシュ政権、日本は森内閣だったがいずれの政権もやや行き詰まり感があり、日本の人が「アメリカも藪 (bush) の中ですね。日本ではこう言う場合に藪の中だと言います」と発言された。それを受けてアメリカ側の人が「そうなんです。まだ “We are not out of the woods.” (森から出ていない) (not out of the woods: 困難なことから抜け出していないの意味) と返して会場は大きな笑いに包まれた。

同時通訳は時間との戦いでもあり、言葉の選択をゆっくり吟味している余裕はない。自分の引き出しにできるだけ多くの「材料・小道具」を持っていることも必要だが、言った人の意図を正確に瞬時につかむ能力も常に磨く必要がある。何のことを言っているのか、なぜ今それを言っているのかが通訳者にピンと来ないと適切な訳は出せない。話者の頭の中に入り込んで、同期化するというか、その人と同じペースで考えられないとスムーズな訳を出せない。もっと言うと、話者が次に言いたいことも容易に分かる、予測できるぐらいでないといけな

Frame of Reference を考えるとき、大切なことは同じ言葉を聞いても、それによって想起される概念が同一ではないということだ。日本は長年鎖国をしていて、均一的な環境下で文化が栄えた。Homogenous な価値観があるため高度で精緻な文化を作り得た。他方、自分達とは違う frame of reference を持つ人たちがいる、ということにはなかなか考えがおよばない。異なる価値観の人たちにはどう聞こえるのかを想像してみる力が不十分ではないか。普段そういうことを日本人同士の間ではやる必要がないからかもしれない。アメリカや世界の他の地域では異なるグループが共存しているために、しばしば軋轢を起こす。日本ではこういうことがない分、異文化の人を思いやる、そういう人の立場を想像してやるのが少ない気がする。これが「国際的」「国際性」と言う事ではないだろうか。

通訳をするときも、この注意が必要で、これをおろそかにすると、表面的な単語の置き換えに終わり、意図するところが正確に伝わらなくなる。

日本語を英語に訳す場合の落とし穴。これは日本政府の代表発言などにもしばしばみられる。国際会議で日本政府が正式に発言するとなると、事前にその原稿が関係各部署に回され、内容が確認される。結果、最終の成果物である原稿が通訳に渡されて、「この通り訳してください」と言われる。通訳者は一言一句違えずに訳をつけ、それを読み上げる。会場では日本代表が日本語原稿を見ながら、訳される

英語を聞いて、「全部正確に落とさず訳された」と満足される。しかしここでの問題は、英語だけを聞いていた人たちにどこまで内容が伝わったか？なのである。日本語で事前に内容を知りつくしていた人が、訳された英語を聞くと、全部内容がカバーされたと思いがちである。しかし英語でしか聞かなかった人にどこまでそれが伝わったのかが測れない。残念ながら英語だけを聞いていた人にはちんぷんかんぷん、という事もある。

こう考えてくると、今後も人間通訳の果たす役割はまだまだありそうだ。AI の発展が著しい今、今後は我々と AI の競争、切磋琢磨になるのかもしれない。



2014年4月 米オバマ大統領（当時）と天皇皇后両陛下（当時）の懇談風景

